Japanese Association of Educational Psychology

るか.

吉田泰子 (7): 3分類からの落ちこぼれはあるが，それがかならずしも日本語と英語の構造のちがいによるとは考えない．位置の定まってくる文節には，ボク，ボクモ，コレ，ココ，アレ，パパ，ウルトラマン，自分のなまえ，チョーダイなど.

村石昭三 (国立国語研): いまあげた例は単語が主であって文節とは云いがたい．文節として定まってくる例は何か.

吉田: モイチド，モウチョット，ミテゴラン，ボクモなどがみられた.

村石: 単語を文節とよぶことや，モイチドなどを2文節と認めたりすること，また文節文というよび方に問題がある.

高木: 日本語の場合は語順について助詞がつけば，どこへきてもさしつかえない場合が多いのではないか，これが日本語の語順がルーズとみられる点である．この点，乳幼児における助詞の脱落はそれを観察者が適宜，類推し補なった上で，日本語の構文習得の研究を進めるのも一方法であると思う.

滝野伸子 (10): 数命名・量形態はケルンのものを一部加えて使った.

鈴木治 (東学芸大): 数活動の研究にどういうわけで模写を使ったか．何か従来明らかでなかったことがこれで明らかになるか.

滝野: 数図にもって行くつもりである．また，形のある数だから，形と数とどちらが先に把握できるかについての検討もある (この後 Skill と数の把握の関係についての討論あり).

鈴木—酒井氏の発表で，思考力の発達と算数の指導法の関係は？

酒井: 思考力だけで算数問題の解決ができるわけではないから6つの領域でどの領域が思考と関連が高いか調べ，学年による重要度の推移をみた．少くとも思考力が本質的に重要なものと考えたので，これを中心とし，その発達が解決にどの程度影響するかを学年別にみた．次年度は思考力のほか，学年によっては他の要因が重要である場合もみられたので，授業による実証によって，要因に応じた指導法を明らかにして行きたい.

(村石昭三・酒井　清)

2 発　　達 (幼児 3)

13 幼児を対象とするソシオメトリー的測定の試み

○阿部智江 (茅ヶ崎恵泉学園)
長谷川浩一 (青山学院大学)

14 発達過程に関する研究
—発育の個人別リズムについて—

高橋実子 (別府大学)

15 小児の心身発達に関する追跡研究 (第五報告)
—情緒不安児および未熟児の発達に影響する要因について—

○堀端孝治 (愛知教育大学)
丸井文男 (名古屋大学)

16 出生時体重と学童期の精神発達
—YG 性格検査成績—

○佐藤新治 (長崎大学)
後藤ヨシ子 (　〃　)

17 出生時体重と学童期 (第6学年時) の知能発達

○後藤ヨシ子 (長崎大学)
佐藤新治 (　〃　)

18 優秀児の特質に関する基礎研究 (第23報告)
—第二教室 (優秀児学級) 出身者の追跡 (1)—

○森　重敏 (岡山大学)
後藤嘉余子 (東京家政大学)

I 全体的特徴

この部会では，30名ばかりの参加者で発達 (幼児) に関して6題の研究発表が行われた．まず，1題は阿部ら (13) による幼児を対象とした実験的研究であり，5題は同一個人を対象とした縦断的研究であった．5題のうち，高橋 (14) および堀端ら (15) による2題は，時間軸を小さくとって身体的発達を問題テーマにしたものと，身体的心理的発達の両面から研究せんとしてその中間報告をなしたものであり，他の3題では時間軸を大きくとって試みたテーマで，そのうち佐藤 (16) と後藤 (17) の2題が発達の初期の状態と現状との発達的関連を見出さんとした研究，森ら (18) の1題が初期における特定の精神的特質をもったもののその後の社会的生活における特質との関連を見出さんとした研究であった.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

これらの研究は，いずれも基礎的な研究であり，発達研究上示唆に富むものであった．1時間半に亘って活発にかわされた討議は，各題に対してそれぞれ突込んだ内容のものであり，とくに研究方法に関する質疑や意見が多く見られた．また，最後に，このような縦断的研究をなすときに直面するいくつかの問題点も指摘された．最後の問題提示は，この種の発達研究における一般的討議題として有意義なものと思われたが，討議の予定をはるかに超過した時間的制約のため，今後にその課題展開を期することにして本討論を閉じた．

II 討論の内容

阿部らの研究については，まず滝野（浪花女子短大）が，写真呈示によるソシオメトリック・テストでは1枚ずつ呈示して好悪判断をさせているが，何枚かの写真の中からより好きなものを選択させる方が集団構造の分析法としてよいのではないかと提起した質問に対して，阿部は，従来からこのようなやり方が用いられているのでそれによって実施し，われわれの試みた「ゆうびん」テストと比べてみたのであると答え，次に松田（広島大学）が，幼児に対する写真呈示によるソシオメトリック・テストの信頼性をどう考えているかと発した質問に，共同研究者の長谷川（青山学院大）は，写真呈示によるソシオメトリック・テストはすでに日本女子大で実施し，研究されているもので，一対比較法では Class size によっては困難であり，順位づけをしても大して意味がないと思われるし，また簡便にできる測定法として写真に代る「ゆうびん」テストがそれとかなり一致度が高いとすれば，現場における指導法に役立つものと考えている，と返答した．高橋の研究については，高橋（神戸大）が，個人の身体的リズムにおいて，ストラッツのいう第1伸長期の身長の伸び率と第2伸長期のそれとは同じと思うか，それともちがっていると思うか，実施された研究の資料を通じての発表者の意見を求めたのに対し，発表者の高橋は，身長の発育についてそのような点から考察していないため，今後その点から考察してみたいと答えた．堀端らの研究については，古沢（日本女子大）が，情緒不安児の分析において性差を考慮したか，また未熟児についてどう考えているかと質問したのに対して，堀端は，情緒不安と関連ある項目として性差は考えなかったので分析項目に入れられていない．他の項目との関連において情緒不安が発生してくるとも考えられるので今後は性差も検討してみたい．2才半で情緒不安児とされた対象児のその後の経過をも考察していきたいと思っており，また情緒不安とされなかったものがその後何らかの異常行動があらわれた場合についても follow-down をしてみたいと思う．また，未熟児の中にも在胎週数の長短や先天的疾患の有無，出生時における異常の有無などによってその後の発育に影響するものと考えられるが，WHO の基準にもとづいて定義している，と回答した．佐藤らの研究については，高橋（神戸大）から，結果としての出生時体重は妊振中の母体の栄養状態によってとくに大きな影響をうけているので，出生時の体重がその後の情意的面の発育に影響するとは考えられないと思うとの意見が出され，また，長谷川（青山学院大）からも，出生時の体重は情緒面の発達に直接的でなく二次的影響があると思うとの意見があった．それに対して，佐藤から，出生時の体重は性格の生物学的側面には何らかの関係があると思われる．前回，出生時の体重と P·F スタデーやロールシャッハテストとの関連において若干の関係が見られたように思うが，今回の質問紙による Y-G テストの結果ではあまり関係があるようには思われなかった．今後は一人一人の事例研究によって確めてみたい，と回答があった．さらに，森（岡山大）から，体重と情緒面のみならず，子どもの心身の調和的発達に注目した全人格的特徴との関係について研究しておられないか，と質問を呈したのに対して，佐藤は，方法上はっきりしたものがないので実施していない，と回答した．後藤らの研究については，松田（広島大）から，出生時体重と小学6年時の知能発達との関連をみているが，小学6年時における体重と出生時の体重との関連をみて，その上で知能との関係はみておられるか，と出された質問に対して，後藤は，小学6年時の体重については出生時体重と対応させていないと答えた．また，高橋（別府大）から，体重だけが知能の発達に影響しているように受けとれる．実際には，出生後の社会環境条件が多く競合して知能の発達に影響していると反省されているが，量的に表現しうる体型の特徴が知能発達とどのように関連しているかを今後研究されるよう望むとの希望が述べられた．こうした討議の過程で，体重などの身体発達と知能との関係に関する一般的傾向について質疑がかわされたことに関連して，森（岡山大）から，従来森らの試みている優秀児の研究のうちの発達的研究の結果で，優秀児の出生時体重が一般児の標準より大きいという傾向を見出したことがあるが，対象や研究方法によって結果も違ってくる．よって，体重などと知能との間の相関関係を一義的に見出すことは困難であろう，との意見が出された．最後の森らの研究に

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ついては，松田（広島大）から，このような長い年月の間隔をおいた研究ではどうしても不明者が多くでてくるので，control group をとって研究する必要があると思うとの意見があり，これに対して，森は，今回の研究は以前試みた予備的追跡調査の問題点の検討と対象の発達的実態を分明にすることが主目的であることから，特に control group との比較はしなかった．この種の control group のとり方については問題はあるが，本研究を発展させていく過程で control group との比較研究を将来行うことをも考えている．不明者の数（約0.8％）は必ずしも多くないが，できるだけ今後の追跡過程で消息を確認して行きたいと思っている．との見解を述べた．また，長谷川（青山学院大）から，Terman の天才児の研究においても，そうであったが，創造性の高いものを天才児あるいは優秀児と考えていくことが必要ではないか．また，職業内容よりも仕事の内容によって分類することによって追跡することが必要ではないか，との意見が述べられ，これに対して，森は，天才児の創造性にはもちろんすばらしいものがあるが，普通児や時には比較的知能の低いものの中にも創造性の優れたものがおり，創造性の高さを天才児や優秀児の基底的条件とする考え方には問題がある．知能の優秀性を中心としたすぐれた精神発達を優秀児を規定する基本条件とみた場合，優秀児は将来優れた創造的業績をなしとげる可能性をもっていると考えられることから，そうした意味での可能性を重視してその可能性が成就されたかどうか，成人後の成長発達を追跡的にとらえようとしている．したがって，追跡内容は，当然，職業内容などよりも，仕事の内容つまり業績内容の検討に重点を置いており，前回試みた「大阪市における抜群優秀知能児の追跡」の場合と同様に，本調査で詳細な個別調査が予定されている，と回答した．最後に，本討論のしめくくりとして，森から，今回の諸発表に共通的なアプローチである縦断的研究法の問題がとりあげられ，追跡の仕方には多大の問題点や困難性があることにより，この点で follow-up に多くの問題をもたれる実施者として，堀端に今後の同学者への参考事項を報告してほしいとの要望があり，堀端から，その5年間の追跡研究の経過をふり返えって，研究者が各領域から集って実施しているためにそのチームワークがとくに重要であること，研究から脱落していく対象者をいかに少なくするかということ，今回の発表の粗大調査のほか平行して実施中の少数の精密調査対象者については研究者が一貫して実施していくことがとくに必要であることなど，いくつかの反省点が述べられた．

（堀端孝治・森　重敏）

2　発　　達（幼児4）

19　幼児の遊戯場面の観察 (1)
—場面の差異による遊戯行動の比較—
○山田英美（同朋大学）
大西誠一郎（名古屋大学）

20　遊戯場面の観察 (2)
—遊戯場面の観察の方法論的検討—
○大西誠一郎（名古屋大学）
山田英美（同朋大学）

21　保護者隔離場面における幼児の不安と緊張
桜田光男（桜田児童研究所）

22　幼児の社会性に関する基礎的研究
—2人の幼児間の遊び方の分析—
牛山聰子（東京教育大学）

23　親子の類似性と性差について
稲田準子（広島女子大学）

24　発表取消

25　人間愛の発達についての研究（Ⅱ）
—その2—
○橋口英俊（東京経済大学）
沢田慶輔（立教大学）
神保信一（明治学院大学）
原　秀夫（堅川中学校）
荒木徳也（平塚小学校）

26　人間愛の発達についての研究（Ⅲ）
—その3—
○神保信一（明治学院大学）
沢田慶輔（立教大学）
橋口英俊（東京経済大学）
原　秀夫（堅川中学校）
荒木徳也（平塚小学校）

NII-Electronic Library Service